

青春の回想

東京都 関 栄 夫

この世に生を受け、軍隊をしてソ連抑留苦難の道への始まり……。

大正十二（一九二三）年七月十八日、山梨県甲府市にて出生、家業は材木商と製材工場を営み、祖父、父母、姉、兄、妹、私（次男）の七人家族。

昭和十六（一九四一）年、県立甲府工業学校土木科卒業、同年南満州鉄道株式会社入社、出向旅順工科大学土木工学科入学、昭和十九年秋、在学中応召、佳木斯の満州第七三三工兵部隊入隊、南方各戦線に転出した後の留守部隊でした。

直ちに破甲隊に編成され、九九式短小銃、帯剣、鉄帽、軍服、肌着、水筒は二人で一個支給された。訓練期間中は、箱爆弾を背負い戦車目がけて自爆を完遂する肉薄攻撃、鉄船運搬組立、足場作業、川の中での橋

の人柱、戦車を通す橋掛け、橋梁及び建物の爆破、初年兵の厳しい訓練に明け暮れた毎日でした。

もちろん日曜外出は一切なく、訓練も終わりに近い頃、息つく間もなくソ連軍を迎え撃つべくソ満国境の陣地構築作業に参加した。

日ソ開戦となり、ソ連軍が戦車と共に攻撃してきた。肉薄攻撃に出動したが、銃のみでは交戦できず、戦果は悪く何人かの戦死者も出ました。

上官の撤退命令が下り、クモの子を散らすごとく無我夢中でちりちりばらに逃げ、危険を感じ昼は山中の穴に隠れ、夜になるのを待ち山を下り、道なき所をさまよい歩き、かろうじて一命を取りとめた。

そこに居合わせた戦友十二人と共に逃避行が始まった。途中、突然ソ連軍の戦闘機の機銃掃射を受けた。「危ない、身を伏せろ」誰かが叫んだ、反射的に身をかわした。しかし戦友の一人が不幸にも目の前で倒れて息絶えていた姿を見た。これが戦争の哀れさ、涙が止まることなく、追われている自分には落ち着いて葬ってやることはできず、合掌してその場を去る。

明日は我が身か。食べ物はなく、野草、木の実など食べ、飢えをしのいだ。

ソ連軍は既に満州各方面に進駐していた。身の危険を感じても食糧の確保だけはと満人部落、開拓団部落へ調達に行き、荒らされた家屋、焼かれた家、老人、病人、乳飲み子が無残な姿で残されていた。老人いわく、ソ連兵による物資の略奪や婦女暴行、悲しい毎日。女の人は坊主頭にして昼間は身を隠していたそうです。

道路端には、逃げ遅れたのか、置き去りされたのか、泣きじゃくる子供が、「兵隊さん助けて」と、助けを求められるが、どうすることもできない。荷物を積んだままひっくり返って散乱しており、逃げるのに精いっぱいだったのでしょう。在留邦人の悲惨さが今でも目に浮かんできます。

艦砲射撃も受けました。コウリヤン畑に逃げ込み交戦、コウリヤンの細い幹に弾が当たり裂ける音。銃のみではままならず何回となく死を覚悟した。

十二人で逃避行した戦友は、途中で戦死、行方不明

になり、最終的には七人となってしまった。

南下渡河中、馬に乗った階級章を取り外した日本人将校らしい者に敗戦終戦を知らされた時は、半信半疑で、驚きで声も出ませんでした。

方正県で即座にソ連軍の武装解除を受けた後、ソ連軍の意のまま連行された所は、入隊時の佳木斯の旧戦車部隊の営庭でした。

各地から集結合流二千人くらいの人員、ソ連軍の厳重な監視下に置かれて野宿生活、水も自由に飲むことも許されず、そこで各班に編成された。

通訳の説明があり、諸君達は朝鮮及び大連經由だと一般人の引揚者が非常に多いため遅くなるので、ウラジオストック經由で祖国日本へ。これで満州ともオサラバだと思った。喜びで皆涙いっぱいでした。

佳木斯の埠頭より船で松花江、黒竜江を下り、ソ連領に入り下船した。ウラジオストック方面行き列車待ちということでもたもた埠頭で野宿生活。しかし祖国へ帰る希望があるゆえに苦にはならなかった。

実は列車待ちどころか大量の占領物資が黒竜江の対

岸から毎日運び込まれて来た。全部日本製品で、軍需物資のほか米、大豆、アワ、コウリヤン。食糧品から衣類、工業製品に工場の設備機器類、牛、馬、豚まで、満州が空っぽになるほど物資が毎日荷揚げされて、この作業は二十四時間三交代制で昼夜の別なく続けられた。十五日間くらい大変な重労働を課せられた最初でした。

荷揚げ作業も終わりに近づき、今度こそ本当だろう、待ちに待った列車が来た。有蓋貨車に乗せられて外の風景は見ることはできず、夜になり出発、小窓からかすかに明かりが見える程度。もちろん便所などなく、列車が止まったときに素早く用便をする。

ウラジオストック方面に列車は進んでいる。夜のシベリア鉄道を走りながら額を貨車の床につけ祈り続けた。誰もが信じていた。しかし誰となく言い出した、これはおかしいぞ、太陽の沈む方向に列車は進んでいる。北上に伴い僅かな望みも空しく、最終的に夜が明け着いたところは、思ってもいなかったウラジオストックとは反対方向の、木材が山のごとく集積された

ブレイヤという駅でした。ウラジオストックどころか、通訳の言った帰国とは真つ赤なうそ偽りでした。

直ちに駅の引込線より木材運搬専用森林鉄道の台車に乗り移り、山の奥へ奥へと進んだ。着いた所はソ連の囚人収容施設跡で、二百メートル南北東西同じくらい、四隅に監視用望楼が設けられ、逃亡防止のためだろ、その間約五メートルに有刺鉄線で柵を二重に張り巡らされている。囚人宿舎は何年かが過ぎ、崩れ落ち、廃墟になっていて、直ちに住む事はできない。

収容所の外にはソ連軍の将校官舎、兵舎、パン工場、倉庫、食堂は既に補修されていた。早速ソ連将校及び監視兵関係者が住み込んだ。我々はまたもや柵の中での野宿生活。出入り口は一つで、四隅の望楼には既に監視兵が銃を構え厳重に収容所内を監視していた。早速各班に編成され、我々の宿舎造りが始まる。深さ一メートル、横二メートル、長さ三十メートルの縦長穴を掘り、監視兵つきで山に行き、小丸太、木の皮、山ごけを調達持ち帰り、半分地下構造合掌を組み、屋根には木の皮を張り、周りに土を盛り上げ、す

き間には山ごけを詰め、外気を防ぐ。床には小丸太を並べ、上には乾草を敷き詰め寝床を造った。ほとんど寝返りもできない状態で寄せ合って寝るのですが、一度小便などで起きると、自分の場所に入るのが大変でした。武装解除以来、雨風をしのぐことのできる屋根付き宿舎に泊まることができてほっとした。

ドラム缶を半分に切つてのストーブ二基を備えて薪をたき暖を取る、明かりは松油をたき室内の照明にし、一応準備完了。

落ちていたその時、ソ連軍の私物検査が始まり、身に付けている物、眼鏡、時計、万年筆、鉛筆、小刀、革バンド等目ぼしい物は全て没収されてしまった。

やがて冬を迎える酷寒の地シベリアで悲劇の重労働が始まるのです。

ソ連将校は人員の数え方が遅く、四人縦隊と見やすく並んでも列の線に一人でも出遅れがあると、また最初から数え直す。また、十人縦隊で一列ごとに一、二、三と前に出て数えるが、最後、半端人員が出ると分からなくなる。野外の点呼は、朝と夜、二回行なわ

れる。冬の寒さは半端な寒さではない、寒いから足踏みを始めると凍結した雪が音を立てる。数える事ができず、足踏みを中止させられる。点呼が長時間かかり足踏みを止めると凍傷にかかってしまう。酷寒の地での点呼は大変でした。将校の算数の能力の低さ、うそのような本当の話です。特に掛け算は最も苦手のような話でした。

特務機関、憲兵、戦闘に参加した者で編成された赤軍の管轄する特別強制労働大隊でした。聞いてびっくり、二度と祖国の土を踏むことはできないと思ったり。

夜中に小便に行くときは月の明かりを頼りに、暗いときは柵を頼りに近づくことなく行くが、柵に触れたのか、逃亡と見なされて望楼の上より監視兵に射殺された最初の犠牲者が出た。どうなったのか定かではない。

収容所の体制が整ったとき、休む暇もなく作業大隊の本命である伐採作業命令が出た。

基準の零下四十五度で作業中止となっているが、半端な寒さでないので四十五度も分からない。

二人用の鋸と斧を背に担ぎ、腰には食器がわりの缶詰の空き缶をぶら下げ、監視兵が前後、横に、マンドリン銃を構え伐採場所まで誘導する。この時期はまだまだ体力も衰えていなく、我々を大変警戒して一歩もそばには近寄せることはなかった。伐採班は六人一組として斧二丁、鋸二丁、伐採をする者、指定寸法に切る者、枝を払って焼却する者、建築材と薪材に分かれていた。伐採は大木を切り倒すので大変な危険作業で、鋸は二人向かい合って挽くのですが、呼吸が合わないとなかなか切ることができない。一年二年と過ぎ、慣れてきたときは体力が減退してきた。

大木が思いがけない方向に倒れて木の下敷きになり一命を落とした者、これも過労、栄養失調のため機敏さが失われ、大声をかけても逃げ遅れてしまうのです。

最後に六名で伐採した木材を積み重ね、「ノルマ」一人当たり五立方メートルですので三十立方メートルにしてソ連囚人監督の検収を受けるのですが、誠に頭が悪いので計算に時間がかかり、手まね足まねして説

き聞かせるのです。証明を監視兵に提出、他の組の終わるのを待ち山を下りるのです。

最終的には作業の慣れがノルマを増すことになった。抑留一、二年ともなればお互いに体力も衰えてくる。ノルマを達成するには体力のある者同士で組むようになり、力のない者とは絶対に組まない。負担が自分の身にかかってくる。他人の事など考える余裕なし。共に助け合うという言葉はここでは酷であるが通用しない。

検収済み、積み重ねた木材をトラックに積み込む。作業トラックは米国製前後輪駆動の車、囚人の運転手にも一日何回というノルマがかけられているので、運転も従って乱暴になり、積込み積下ろしも急がされる。積み込んだ木材の上に乗る、傾斜曲がりの多い山道を下るので、途中で振り落とされて一命を落とす者も少なくはなかった。集積場にて下ろし終わると、またそのトラックの荷台に乗り山に戻り、また積み込むという繰り返し作業。終われば今度は集積された木材を貨車に、発車時間までに積み込み完了しなければな

らないつらい作業です。

冬は零下四十度という寒さの中での作業が毎日行われていたのです。何もかも凍り、吐く息までも凍る。

伐採場の往復、作業中に過労と栄養失調のため倒れて、そのまま枯れ木のごとく死んでいった戦友もいた。

夜な夜な狼が遺体を食い荒らし、次の日には影も形もなし。狼は近くで吠えているが、たいまつをたきながら夜空の星を見ながら、故郷を思い出して山を下り、一日の作業が終わり夕食にありつける。

三年間で二つの山の峰が見えるくらい坊主山にしてきました。

伐採場もだんだん遠くになり、歩く時間が多くなつて、伐採する時間が短くなり、ノルマの達成が大変な苦勞となる。新規の伐採場に伴い、トラックの走る山の中の道路も木材運搬鉄道の軌条延長もすべて新規にて建設され、ここにもノルマがかかる。

このような寒さの中での作業、何回となく死んだ方がよいと思つた事もあつた。でも体の続く限り頑張っ

てと思い直したこともあつた。

ノルマの増えたのも、だまされて早く作業が終われば休んでよい、この言葉を信じて一生懸命早く終わらせ余裕があると見なされ、ノルマを自分自身で増やしたも同然のことであつた。

我々の収容所は山の中にて、食糧が届くまでは何回となく積み替えが行われ、途中で搾取されて定量の食糧が届かなかつた。主食の雑穀も配給定量以下、パンは現地の工場で焼いているが、焼きたてのパンに水をかけ重量を増して受領させられた。アワのみで米は一切口にしたことはなかつた。食事は三度ともアワの三分粥、夕食は黒パン一切れ、枕ほどの大きさのものを十六等分に切り、パンの上に番号札をのせ、くじ引きする。伐採作業の場合は山にて粥にいろいろの食用となる草を入れて量を多くして煮て食べる。知らずに毒草、毒キノコを入れて血を吐き一命を落とした者もいた。

馬そりからこぼれた馬鈴薯を見つけると皆競争で拾つて持ち帰り焼いて食べる、あの時の味は今でも忘

れない。しかし馬糞が凍っていると馬鈴薯と見分けがつかず、間違つて焼くと解けてしまったこともあった。ネズミ、カエルの卵、昆虫の幼虫、木の実、野草、リスが木の根っこに蓄えておいた松の実など焼いて食べた。夏は食べ物も冬と違いあるが、冬ともなると一面雪に埋まり何一つ無く、また、使役に出たときはソ連兵の食堂の残飯をあさり持ち帰る。収容所内の炊事場から交代で受領してくる粥の中に片手を入れてすくい食べる者、パン受領の際も同じように屑パンがあれば食べる者もいた。抑留生活に耐えるにはこのようなことをしないと生きていけない極限の生活、衣食住すべて最低の生活であった。今振り返っても恐ろしい、よくぞ生きていられたと思う。

夏は川で体を洗うことができるが、冬は着たきり筐で、飯盒一杯ぐらいのお湯で体をふく程度。シラミがわき、月二回の熱風消毒が行なわれた。衣類は軍服、武装解除を受けたままで、補修に補修を重ね身につけていた。ソ連軍より支給されたものはシューバーとフェルトの靴のみ、ほかは軍隊当時そのままのものを

着用していた。

軍医とは名ばかりの教育程度の低さ、診断を受け、切り傷、熱があれば休ませてくれる。それ以外の病は一切だめ。重労働作業に耐えるよりも痛さを押してでも自分で傷をつけ、また体温計をこすり温度を上げ、便の中に血を混ぜ合わせ血便が出たようにして診断を受ける者も少なくはなかった。最初はこのようなことがまかり通ったが、軍医の耳に入り一切認めることがなくなった。そしてまた別の事を考えて少しでも体を休ませる。実際に、不幸にも作業中事故により傷を受けた者は監視兵の証明がないとだめ。休日認められなくても重労働でなく軽作業使役にかり出される。将校官舎への水運び、薪割り作業、将校家族の人糞樽出し入れ捨て方、酷寒の地にて各々家の中で用便をするためにこのような事をした。

収容所の中には宿舎、炊事場、医務室、隔離小屋には四人の伝染病者がいたが、死んだのか移動したのか、どこへ行つたかなくなつた。また新規の者が隔離された。

炊事場では軍隊当時炊事を経験した者が八人で八百人分の食事の粥を作り、各班ごとに分配していた。

医務室には女性の軍医が一人常勤務していた。宿舎は八棟、隔離小屋は宿舎から離れて奥の角にあった。

便所は、幅が三十センチ、深さ一メートル、長さ三十メートルの穴を三つ掘り、またがって並んで用便をする。柵など一切ない。夏はいっぱいになると埋め戻し新規に掘る。冬は掘ることができないので夏のうちに掘っておく。冬は酷寒の地にて糞は凍結し盛り上がるので各班交代で金棒で砕く。時には衣服に飛び散り附着する。溶け出して悪臭が発散する。もちろん用便後は紙は使用しない。支給なし。木の葉、小石、小枝などで間に合わす。公衆の便所には一切ドア等ない。ソ連兵は紙で尻をふくという事はしない、用便後はスズポンを引き上げる。

冬の宿舎は、暖はドラム缶を二つ切りのものをストーブにして交代制で一晩じゅう薪をたく。照明は松油をたく。朝起きると鼻の穴と痰が真っ黒になる。悪い空気を吸い込んでいるので肺結核になり、どこかへ

送られた者もいた。

故郷の話、一日も早く帰りたいな、共に話し合い床に就いた戦友が、朝になると苦しむこともなく冷たくなって死んでいた。やがて自分の身に迫ってくるかと思ふと不安でした。

書類用の紙はすべて満州で印刷された広告などの裏を利用、いかに物資が不足であったかがうかがえる。

抑留中三年間はすべて満州より運び込まれた麻袋に入っていた穀類でした。

困ることに、作業に出た後に私物検査が度々行われ、大切な物がなくなっていた。

今年もまた寒い冬がやってきた。何の音さたもなし。来春への希望を持ち、祖国日本に帰れるその日を楽しみに待つのみです。

収容所の外では普段と違い将校、兵隊、関係者が頻繁に行き来している。ことによると「ダメイ」の知らせがあるのではと勝手に想像し、収容所内でデマが飛び散り、誰もが本当であつたと願う。このような状況は再三あつたが、今日だめなら明日があるさ、希望を

捨てず頑張ってきた。

入所当時は八百人からいたが、死亡者、入院者、どこに移動したかは定かではない。生きるための最低の事もしないで酷使したから多くの犠牲者が出たのです。結局帰国人員は四百五十人くらいになったと思います。

いよいよ待ちに待った東京ダモイの通達が通訳を通してあり、幾度となくダモイは聞いたが今度こそ本当に信じられる、三年間待ち焦がれていた帰国の報に歓声があがった。

飢えと寒さ、厳しい労働に耐え地獄のような思い出も嬉しさに変わって夢を見ているようでした。しかし、日本には食糧、電気、ガス、水道、交通機関等はすべてないと聞かされていた。何もなくても良い、一刻も早く帰りたいの一心でした。

出発前日に初めてソ連軍施設のシャワー室へ。衣服を脱ぎシャワーを浴びた後、別の出口から順次出されて、前の場所には戻ることができず、服に縫い込んでいた戦友の住所録も戻ることはなかった。新規衣服に

着替えさせられた。もちろん満州からの占領物資品です。

シベリア鉄道ブレイヤ駅は三年前は下車駅でした。酷寒の地での重労働の始まる第一歩の駅で、その駅が今度は乗車駅と変わり、天と地が逆になって帰国の第一歩となったのです。駅の周辺は三年前入ソした当時と変わりなく木材が山のごとく集積されていた。

ソ連側では君達を一日も早く帰したいのですが日本政府からの船が来ないと言っていた。これもまたうそでした。

いよいよ帰国専用列車に乗ることができた。貨車の中では、共産主義をたたえ、話を聞きながら盛り上がっていた。反動的な言動をすると大変、ナホトカに着く前にまた山に戻される何人がいた。ナホトカ港に着いた。すでに乗船待ちの帰国者でいっぱいでした。順番でなく後から着いた者が先に乗船することもあった。我々はそこで五日間くらい待たされた。日の丸の旗をつけた高砂丸が港に入ってきた。船上の日本人船員が手を振って出迎えてくれた。感無量。帰国の

手続きが無事に済み、後ろを振り向かず、船のトラップを一步一步踏みしめながら上る足は軽く、長かった三年間の抑留生活も今日で本当に終わった。後を振り向かず、私達は船倉の一番下だった。汽笛が鳴ってエンジンの音も気持ちよく聞こえた。この海が日本まで続いていると思うと駆けだしたい気持ちになった。

高砂丸はナホトカ港を出発、真つ青の日本海を静かに進み、まるで夢でも見ているような感激の航路であった。静かに滑るように舞鶴港へ。「あつ、日本だ」の声がした。皆が甲板に駆け寄り、遠くに見える丹後半島の山々を見て涙、涙でいっぱいでした。

昭和二十三年十月、栈橋から今度は祖国の土を一步一步踏みしめながら上陸した。一生忘れれることはできないでしょう。大勢の人々の出迎えを受け、三年間見ることがなかった日本女性の美しさ、ことに白衣の看護婦さんの姿は痛いほど美しく感じた。

上陸すぐの入浴は三年何カ月ぶり、あかを落とし流し合い、湯船の中で裸で話ができる幸せは夢のようでした。予防接種、DDTの消毒を済ませ新しい衣服下

着を支給された。GHQ関係局の、現地ソ連での居場所状況及び死亡者の知る限りの氏名等詳しい聴き取りを受けた。

二泊して舞鶴を後にして出身地都道府県へと帰途についた。途中の停車駅、車中で大勢の方々にお世話になりました。しかし生まれ故郷に着いてみれば戦災により家を失い昔の面影はまるでなく、父母の生死すらわからず途方に暮れた。田舎の親戚を訪ね、父母の居場所を聞き捜し当てた。幸いに年は取ったものの健在で再会することができました。

びっくり驚くのも当然なこと、三年前に戦死の公報が出ていたのです。息子が連絡もなしで帰ってきたのですから、父母もキッネに鼻をつままれたような驚きだった。早速赤飯を炊き祝ってくれましたが、栄養失調で帰って来た私には急に栄養分が強かったのか体調を崩し、二、三日寝込んだ。

その後一年くらい親元にて暮らし、叔父の世話で製紙機械会社に勤務、定年を迎えた。

二人の子供も独立して、今は家内と一緒に年金暮らし

して平和に過ごしています。

軍隊生活一年、シベリア抑留生活三年、時には生死の境をさまよい、飢えと寒さ、重労働に耐えて、無事に帰ることができたのも今思うと不思議です。

いずれにしても、青春真っ最中の暗い悲しい軍隊生活、そしてシベリア抑留生活は、一体何であったのか。不幸にも抑留中過酷な重労働と飢餓と寒さや病気のため犠牲になった戦友は、故郷の土すら踏むこともできず、残念であったことでしょう。今もなお凍土に眠る幾多の御霊に対し安らかに、心から御冥福をお祈り申し上げます。

最後まで隠し通した戦友の形見の手帳は私物検査で没収され、遺族の方々に連絡も取れず大変残念至極です。

シベリアの地に渡り線香をと思っても、半世紀、時は流れて、体力の衰えもあり、今ではそれもかなえる事もできず、このような悲しみは我々経験者のみが知る事で忘れ去られてしまうでしょう。せめて毎年行われる慰霊祭にはできる限り出席いたすように心掛けて

おります。

戦争は不幸と悲しみだけを残した。

我が八十年史

東京都 関 口 健 治

現住所 東京都北区十条台

出身地 栃木県下都賀郡皆川村字新井

生年月日 大正九（一九二〇）年八月五日

家族構成 祖父・倉治、父・吉太郎、母・シヨ、兄三人、姉二人、弟一人、妹二人の四男

家業農業 田一町三段、畑一町二段（米、大麦、小

麦、麻、葉タバコ、トウモロコシ、野菜類

等）

昭和十（一九三五）年三月 皆川尋常高等小学校卒業

四月 家庭金物御問屋 高木金藏商店入社

昭和十五年四月 徴兵検査 第一乙種合格

十月 横須賀海軍工廠